定番絵本です。

ねこ、たぬき、ごりら、かえる、そして、人間の赤ちゃんが、つぎつぎに登場して、おなかを「ぽんぽんポコポコ」。単純明快な展開です。「ぽんぽんポコポコ」といいながら、赤ちゃんのおなかに手を伸ばすと、「きゃっきゃっ」と、あんよを蹴り上げて喜びを表現する赤ちゃんがいます。「にいーっ」と、はにかみ笑いをしてくれる赤ちゃんもいます。どの赤ちゃんにも間違いなく喜ばれる絵本です。

『ぴよぴよぴよ』（平野剛　福音館書店）もよく使います。「ぴよ　ぴよ　ぴよ　ぴよ……」、ひよこたちが、ひたすら歩いていきます。終盤間際にやっと、「こっ　こっ　こっ　こっ！」、めんどりが出てきます。「ぴよ　ぴよ　ぴよ　ぴよ……ぴよぴよぴよぴよぴよ」、大好きなおかあさんに会えて幸せなひよこたち。赤ちゃんたちも幸せそうに聞いてくれます。が、この絵本で何回か失敗したことがありました。途中で泣き出す赤ちゃんがいたのです。

（えっ！　どうして？）あせりました。どうやら「ぴよぴよ」を強く言い過ぎたようなのです。「ぽんぽんポコポコ」もかなり大きな声を出したのに、なぜ？……。

日本語のことばは、「あ、い、う、え、お」の母音で終わるところに大きな特徴があります。それぞれの母音に、それぞれ特有の語感があります。アは明るく、イは鋭く、ウは鈍く、エは平たく、オは円い。そんな感じがしませんか。「ぽんぽんポコポコ」の「ぽ（オ）」も「コ（オ）」も円い音。「ぴよぴよ」の「ぴ（イ）」は鋭い音。泣いた赤ちゃんの耳には、「イ」の音が人一倍鋭くにひびいたのではないか、と思うのです。

『ぷちぷち』（ひろかわさえこ　アリス館）は、豆から生まれた主人公の「ぷちぷち」がころがる場面、「ころころころころころころ……」が大うけです。早口で読むと、体を前後に揺すって喜んでくれる赤ちゃんがいます。

『ととけっこう　よがあけた』（こばやしえみこ・案　ましませつこ・絵　こぐま社）は、「ととけっこう（オー）　よがあけた（アー）……」。ゆったりとしたわらべ唄の調べが人気です。母音の「オー」「アー」を少し誇張して読むと、心地よさが一層届くようです。

視力がまだ未発達な0歳児は、聴覚を最大限に駆使して、ことば以前の「音」を聞き取ろうとします。「赤ちゃんは、音をまるで食べるように吸収する」と、読み語り実践のなかで教わったことでした。ちなみに、聴覚は胎児の六ヶ月目にして完成しています。

《赤ちゃんは、擬音語・擬態語が大好き》

「ぽんぽん」「ぴよぴよ」「ころころ」は、擬音語・擬態語です。「ととけっこう」も「こけこっこう」から派生した擬音語（擬声語）です。赤ちゃんは、この擬音語・擬態語